# sign

雪菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｓｉｇｎ

【Ｎコード】
Ｎ９９７３Ｗ

【作者名】
雪菜

【あらすじ】
付き合い始めて１年半。同棲を始めて５カ月。
彼女との結婚に向けて仕事に一生懸命になっていた彼氏は、彼女が距離を置く本当の理由に気づいてあげられなかった。
２人の行く末は――――。

## ｓｉｇｎ　１　（ｓｉｄｅ　周一）（前書き）

初めて小説を書きました。
非常に拙いとは思いますが、完結できるようにがんばります！

## sign 1　（side 周一）

――――彼女の様子がおかしい。

そう感じ始めたのは、いつ頃からだっただろう。

共通の知人を通じて、付き合い始めて1年半。
お互い部屋は借りてあるのだが、俺の部屋で同棲みたいな状態になって早5ヶ月。

俺は時々仕事が忙しくなって、帰宅は日付が変わる頃…なんてこともある。
しかし彼女――――裕美（ゆみ）は必ず手料理を用意して俺の帰宅を待っていてくれる。
裕美もOLとして働いているのに。

「おかえりなさい。今ご飯温めるね。お風呂入ってきて。」

裕美の優しい笑顔と声に、疲れなんか一気に吹っ飛ぶ。

俺の帰りが遅い時は、裕美は先に夕食を済ませている。
温かい手料理をがっつく俺の横で、お茶を飲みながら楽しそうに今日一日のことを話すのだ。

寝るときはいつも一緒にベッドに入るのだが、どんなに寝る時間が遅くても裕美は早起きして、必ず朝ごはんを準備してくれる。

「おはよう。髪はねてるよー。鏡見ておいで。」

クスクスと笑う裕美の笑顔一つで、俺はこの上なく幸せになれる。こんな素晴らしい彼女を持てて、本当に俺は世界一の幸せ者なんじゃないかって思うのだ。

できれば同棲みたいな状態じゃなく、すぐにでも結婚したい。でも結婚するからには、絶対に裕美を幸せにしたい。

世の中金がすべてじゃないけど、結婚するからにはそれなりに貯蓄が必要だ。

大卒で今の会社に入社してもうすぐ3年の俺は、やっと大きな仕事を任せてもらえるようになったレベルで、裕美を幸せにできるほどの余裕も貯蓄もまだ足りないと感じている。

だからもう少しだけ。
もう少しだけ、結婚は待ってほしいと裕美にお願いしてある。
裕美もそれに同意してくれていて、『周ちゃんがいいと思えるまで私は待ってるから。だから今は仕事に専念して。』とこれまた優しい笑顔で言うのだ。

あぁ、やっぱり俺は幸せ者だ。
裕美との幸せな結婚生活を頭に描いて、今日も仕事に向かう。

―――裕美との同棲はうまくいっていると思っていた。

## ｓｉｇｎ　２　（ｓｉｄｅ　裕美）（前書き）

ｓｉｇｎ第２話です。
今回は女性視点になります。

## sign 2 （side 裕美）

私の彼、周ちゃんとは付き合い始めて1年半になる。
知り合ったのは私の会社の1つ先輩――――明日香（あすか）さんの紹介。
明日香さんは美人で、仕事がものすごくできて、後輩の私のことをとても気遣ってくれる。
大手製薬会社に勤める素敵な彼氏さんがいて、本当に日々輝いてるなーと感じてしまうのだ。
入社してからずっと私の憧れの人だ。私もこんな風に輝いた女性になりたいなっていつも思う。

「裕美ちゃん彼氏いないよね？大学の同期で腐れ縁のヤツがいるんだけど、ちょっと会ってみない？」
社員でごった返す昼休みの社食で、たまたま明日香さんと二人っきりでご飯を食べていた時、突然そう言われた。

入社してもうすぐ半年という時。
それまでは仕事に慣れるのに一苦労してたけれども、やっとうまくこなせるようになってきた頃だった。

「ヤツとはたまーに連絡を取り合ったりしてるんだけど、『とっても性格が良くて、かわいい後輩ができたの～』って自慢のメールしたら『会わせて』って言い出してきかないのよー」

明日香さんのその言葉は、私にとって衝撃的だった。
私が『とても性格が良くてかわいい後輩』と見られていることに。

すごく嬉しかった。憧れの人にそう思われていて。

『明日香さんの大学の同期の方が私に会いたがってる』ということなんて全然頭に入ってなくて、その後は夢見心地で明日香さんの話に相槌を打っていた。

気付いたらその2日後に、その方と食事をすることになってしまっていた。

慌てる私に、

「大丈夫よ。1回会うだけでいいから。それで裕美ちゃんが嫌ならもう絶対に会わせないし。」

と明日香さんが言ってくれたので、とりあえずその方に会うことを決心した。

2日後の金曜の夜、おしゃれなイタリアンレストランで3人で食事をした。

「はじめまして、柴原明日香の大学の同期の高崎周一です。」

「はじめまして、明日香さんの会社の後輩の有澤裕美です。」

そんな自己紹介から始まった食事だったけれど、緊張して最初のうちは私から話すことができなかった。

でもそんな私を気遣ってくれてか、彼の方からたくさん話し掛けてくれた。

趣味、休日の過ごし方、好きなアーティスト…ｅｔｃ。
話してみると、彼とはとても共通点が多いような気がした。
明日香さんも雰囲気を和ませようと、大学時代の彼の失敗談などを話してくれた。

お酒の力もあり、しばらくすると緊張も解けてきた。
話が弾んであっという時間が過ぎた。

## sign 3 （side 裕美）

デザートを食べ終わった後、彼は『お手洗いに行ってくる』と席を外した。

「裕美ちゃん、ヤツはどうだった？私の目には裕美ちゃんがすごく楽しそうに見えたけど、もし無理してたのなら正直に言っていいから。」

明日香さんと二人きりになると、すぐに明日香さんが私に話しかけてきた。

「すごく楽しかったです。始めは緊張しちゃって、何話していいのか分からなかったけれど、うまく高崎さんがリードしてくれて…。あっという間に時間が過ぎちゃいました。」

「ホントに？」

「ホントです。それに、話してみて私とすごく共通点が多いなって思ったんです。だからもっといろいろな話をしたかったなーというのが本音です。」

「じゃあまた会ってもいいと思ったんだよね？」

「はい。こんな私で高崎さんさえ嫌じゃなければですけど…。私はまた会いたいです。」

「なーに言ってんの！裕美ちゃんは私の自慢の後輩よ??自信持ちなさい。むしろヤツにはもったいないくらいよっ。それに、ヤツの方は全く問題ないみたいよ?私が見てきた中で5本の指に入るくらい、楽しそうに話してたから。」

「え…?」

私と明日香さんとの会話はそこで途切れてしまった。彼が戻ってきてしまったのだ。

「おまたせ。ガールズトークに水差しちゃったかな?」

「べっつにぃー」

明日香さんがちょっと意地の悪い笑みを浮かべていた。

「そろそろ21時ね。高崎、お開きにしようか?あまり遅くなっても良くないでしょ??」

「あぁそうだな。」

「とても楽しかったです。」

「俺もすごく楽しかったよ。」

私は『またお会いしたいです』というたった一言が言えなかった。

彼はどう思っているんだろう。
明日香さんは『問題ない』と言っていたけれど、私には彼の心が見えなかった。

「高崎、お会計しに行こうか。」

「柴原。お会計は大丈夫だ。俺が払っておいた。」

「気が利くわねー。まぁあんたの奢りは当然よね。会わせろってお願いしたのはあんただし。」

「今回だけは特別だからな。」

明日香さんと彼はもともと知り合いだからいい。
でも私は彼と今日初めて会ったばかりだ。
私まで奢ってもらう訳にはいかない。

「あの、私の分は自分でちゃんと払いますっ。初対面で奢って頂くなんて…申し訳ないです。おいくらですか？」

私はカバンから財布を取り出した。

「んもーこの子はなんていい子なの！！でもいいのよ、裕美ちゃん。こいつが『会いたい』なんて言い出したから、食事することになったんだし。」

「でも私だって楽しませてもらったし…」

「いいんだよ、有澤さん。今日は俺が持つって決めてたんだ。…でももし気に病むようだったら、食事代の代わりに連絡先教えてもらえないかな？」

「あんた、ちゃっかりしてるわね。」

明日香さんがため息を吐いていた。

「本当はいつ言おうかずっと迷ってたんだ。でも言えないまま食事が終わって焦ってて…やっと言えたよ。」

彼が照れたように頭を掻いた。

照れている彼を見て、これ以上お会計の話を出して雰囲気を壊すのも申し訳なくなった。

ここは彼と明日香さんの言う通りにしよう。

そう決心してカバンに財布をしまい、代わりにケータイを取り出した。

「高崎さん。奢って頂いてすみません…ご馳走さまです。連絡先、お教えしますね。」

「ありがとう！食事代のことはホントに気にしなくていいからね。」

彼もスーツのポケットからケータイを取り出し、お互いの連絡先を

交換した。

お店を出ると明日香さんは、『彼氏に迎えに来てもらうから、私はここで』と言って歩いて行ってしまった。

彼と二人きりになってしまいどうしていいか分からず、『じゃあ私もここで…』と言いかけて彼に止められてしまった。

「夜道は危ないから」
「もう少し話をしたいし」
「心配だから送らせて」

『わざわざ送ってもらわなくていいですよ』と断ったのだが、彼は一向に引こうとしなかった。

「すみません。じゃあお言葉に甘えて…」
と私が折れて、アパートまで送ってもらうことにした。

送ってもらう間も、彼と話をするのはやっぱり楽しかった。

それから何回か二人きりで食事をしたり出掛けたりした。
「俺と付き合ってもらえないかな？」

と彼から告白されたのは、３人で食事をした日から２週間も経っていなかった。

## sign 4 （side 周一）

今までどんなに俺の帰りが遅くなっても、裕美は寝ずに俺の帰りを待っていてくれた。

だけど最近、先に寝てしまっていることが多くなった。それに朝も早くに出勤している。

仕事が忙しいのだろうか？

最初はそう思っていた。

俺も俺でかなり大きな仕事をまかせてもらえるようになってきて、帰りが遅くなったり、休日出勤をしたりする日々が続いていた。

以前から『俺の帰りが遅い時は、先に寝てていいから』とは言い続けてきた。

裕美だって働いているのに、必ず晩ご飯と朝ご飯を用意してくれる。しかも朝は必ず俺よりも早く起きているんだ。

俺のために無理はしてほしくないとはずっと思っていたし、俺のせいで裕美が体を壊すようなことになってほしくなかった。

でも裕美は「こうやって周ちゃんと話せる時間が、私の元気の源なんだよ。だから全然無理なんかしてない。」と言って、日付が変わる頃に帰ってきた俺を優しく迎えてくれていた。

しかし最近は『お仕事お疲れ様。ちょっと疲れてるから先に寝るね。』というメモが、ラップをかけた夕飯の隣に置かれているだけ。

夕飯を食べ終わってそっとセミダブルのベッドに潜り込むと、裕美は俺に背中を向けるようにして寝ている。

朝も俺が起きると、もう支度を終えた裕美がいて、
「周ちゃんごめん、今仕事が忙しいんだ。先に出るね。ご飯は用意してあるから食べて。」
と告げてすぐに出勤してしまう。

メールを入れても、電話を掛けても、なんとなく彼女の返信や返事に元気がない。

そんな生活が1週間近く続いた。

さすがに、仕事が忙しいだけにしてはちょっとおかしい…と思い始めた。

俺の仕事が忙しくて、拗ねているんだろうか？
一緒にいたくないと思ってる？
俺のことが好きじゃなくなった？

考えれば考えるほど、思考はマイナスな方向に行く。
彼女が俺に愛想を尽かした、なんてことを考えたくもなかった。

彼女が何と言おうと、俺は彼女と別れる気なんてないんだ。
彼女と結婚するために、今仕事を頑張っているんだから。

彼女が何を思っているのか分からない。
そのためにも時間を見つけて彼女と話をしなきゃならない。
でも彼女の本当の気持ちを聞いて、別れたいと思っていることがわかったら…怖い。

ウジウジと考え、結局彼女と話をするきっかけも作れないまま3日が過ぎた。

すぐに彼女と話し合っていれば…と後悔するのは間もなくのことだった。

## ｓｉｇｎ　５　（ｓｉｄｅ　周一）（前書き）

何件かお気に入り登録をされている方がいらっしゃるようで嬉しいです！こんな稚拙な小説に興味を持っていただき、ありがとうございます。
小説はもっと早くｕｐしたいのですが、なかなか納得のいく文章が書けずお待たせして申し訳ないです。

## sign 5 （side 周一）

朝起きると、いつもは俺が起きるのを待って出勤していた裕美の姿がなかった。
『仕事が忙しいから先に出る』と言って、朝ご飯を一緒に食べることはできなくなっていたが、こんなふうに俺が起きる前に裕美がいなくなっていることはなかった。

俺はとても嫌な予感がした。

ラップをかけた朝食の隣にメモが1つ。
少し震えた手でそのメモに手を伸ばし、おそるおそる読んだ。

メモにはこう書かれていた。

『周ちゃんへ
しばらく出張に行くことになりました。
きちんと話せないまま行くことになっちゃってごめんね。
落ち着いたら連絡入れます。裕美』

メモを読んですぐに感じた。
”このメモは嘘だ”と。

ここ2週間くらい、俺はほとんど日付が変わる頃の帰宅だったのだが、昨日は早めに帰宅することができた。
もし本当に出張に行くなら、話をするチャンスはあったはずだ。

同棲を始めてから、裕美は友達に会う時も会社の飲み会がある時も必ず俺に直接伝えてくれた。

直接が無理なら、電話で伝える。メールや書き置きで伝えるようなことはしない。
そんな律儀な彼女を見習って、俺も友達に会ったり仕事仲間と飲む時は彼女に直接か電話でその旨を伝えるようにしていた。

その裕美が俺に一言も言わずに、こんな置きメモ一つだけを残して出張に行くなんてことはまず考えられないのだ。
それに彼女の部署は総務課。彼女の仕事は、データ入力や管理業務がメインだと言っていた。今まで出張なんて一度もなかったし、出張が必要な仕事ではない。

だから『出張があることを話せないまま』だったんじゃない。裕美がわざと『何も話さないまま』出て行ったんだ。

昨日の裕美は———俺が21時に帰宅すると既にベッドで寝ていた。ダイニングのテーブルには、最近当たり前になってしまった『お仕事お疲れさま。先に寝るね。』というメモと俺の夕飯があって。

そこまで回想して、俺は絶望した。

ここ最近、裕美の様子がおかしかった。
俺と過ごす時間が減り、電話もメールもそっけなかった。
そして出張と偽って家を出て行った。

そこから考えられたのはたった一つしかない。

裕美は俺と別れるために家を出て行った———。

急に頭がガンガンと痛くなり、吐き気が込み上げてきた。眩暈もする。
その苦しさに耐えようとテーブルに両手をついた。
うつむいてギュっと握った手の中で、メモがグシャッと形を変える音は俺には聞こえてこなかった。

嘘だ。嘘だ。嘘であってくれ。
裕美、俺のどこがいけなかった？
急に仕事が忙しくなってきてすれ違いの生活だったけれど、それだけで関係が終わるほど、俺との生活は満ち足りてなかったのか…？
結婚の話だって出てたのに。待ってくれるって優しく笑ってくれたのに。
なんで？なんでなんだよっ？
こんなことになるくらいなら、早く裕美と話し合っておけば良かった…

ぐるぐると思考が巡る。

叫びたくなる気持ちを抑えようと口をふさいだ手に涙が伝った。
しばらくの間、どうすることもできずに俺は静かに嗚咽を漏らした続けた。

## ｓｉｇｎ　６　（ｓｉｄｅ　周一）（前書き）

この小説、気がつけばすでに６話…。
当初の予定では５話程度で終わる予定だったんですけどね。
もう少し続きます。
がんばって更新していきますので、よろしくお願いします。

## sign 6 （side 周一）

その後、俺はとりあえず会社に向かった。大きな仕事を抱えており休む訳にもいかなかった。
裕美が作ってくれたラップのかかった朝食は手をつけることができず。食欲は全くといっていいほどなかった。
会社に行ってもとても仕事ができるような状態ではなく、その日は何をやってもミスが続いた。残業してもまったくはかどらず。
19時を過ぎた頃、「今日はもう帰ってゆっくり休みなさい」と上司から半ば呆れられた言葉を告げられ、なんと返事をしたかもよくわからないまま帰宅することになった。

アパートの前まで来て、俺の部屋を見上げる。もちろん電気はついておらず、薄暗い。
それが裕美がいないのだということを感じさせて、動けなくなりそうになる。

なんとか部屋に入り、リビングに明かりを灯す。
テーブルの上には、朝俺が握りつぶしてしまった裕美のメモがあった。
俺はもう一度そのメモを開き、裕美の字を指で撫でた。
そこでふと、疑問に思った。

裕美が本当に俺と別れようと思って家を出て行ったのなら、出張だなんて偽る必要はないんじゃないか？
それに「しばらく出張に行く」ということは出て行ったままではなく、帰って来るつもりがあるんじゃないか？
じゃあなんで出て行ったんだ？

裕美の気持ちが知りたい。
でも、もし決定的な言葉を聞くようなことになったら怖い。
だけど別れるなんて無理だし、このまま放置しておきたくはない。

俺はスーツのポケットからケータイを取り出し、何度も迷いながらやっとの思いで裕美の携帯番号に電話を掛けた。

――――裕美のケータイは「電源が切られている」というアナウンスが流れるだけでつながらなかった。
意を決して、俺は裕美のアパートに向かったが、外から見ると裕美の部屋は電気がついていなかった。呼び鈴を鳴らしても出ない。
裕美の部屋の合鍵は持っているので、合鍵で部屋に入った。

もちろん裕美の姿はなく、空っぽの冷蔵庫やしばらく使っていない台所を見ると裕美がここに来た様子はなかった。

俺は一晩中裕美の部屋で裕美の帰りを待ち続けた。
しかし裕美は帰ってこなかった。

裕美はどこに行ってしまったのだろう？

朝まで裕美の部屋で過ごし、一旦自分のアパートに戻って身支度を整え、俺は出社した。
朝から裕美のケータイに電話をかけたが、やはり「電源が切られています」とのアナウンスが流れるだけだった。
ケータイで裕美と連絡を取れない以上、他のルートで連絡を取らなければならない。
そう思った俺は、仕事の合間を縫って柴原にメールを送った。

『ちょっと聞きたいんだけど、今日裕美は出社してる？』

メールはすぐには返ってこなかった。
もう就業時間中だったから柴原もケータイをチェックしていられないんだろう。
昼休みになれば連絡が来ると思い、昨日のミスを挽回するためにもとりあえず仕事に専念した。

昼になって、俺のケータイが鳴った。メールの受信ではなく、着信だった。
相手はもちろん柴原。
俺はすぐに電話に出た。

「もしもし、柴原か？」
『高崎、あのメールどういうこと？』
「…実は言いにくいんだけど、昨日の朝、裕美が『出張に行ってくる』って書き置き残して家を出て行ったんだ。でも裕美なら、そんな大事なことはいつも俺に直接言ってくれたからきっと出張ではな

いんだと思う。俺との関係を終わらせたいのかもしれない。
ちゃんと話をしたいんだけど、昨日からケータイはつながらない。
裕美が出社してたら柴原から『俺が会って話したがってる』って伝えてくれないか？」
『は？あんた何言ってるの？…まさか何も知らないの！？』
「何も知らないって、何かあったのか！？」

やや間があって、電話から柴原の特大のため息が聞こえた。そして柴原はこう言った。
『今日、定時であがれる？』
「今日は…厳しいな。昨日ほとんど仕事が回らなくて、今日はその分やらなきゃいけないことがたくさんある。」
『絶対定時であがって！裕美ちゃんのこと知りたいんでしょっ！？』
そう言われて『定時であがれない』なんて言葉は出て来なかった。

## ｓｉｇｎ　６　（ｓｉｄｅ　周一）（後書き）

次話は閲覧注意です。
次話の内容は病気ネタが含まれます。次話の前書きでも注意事項として載せますが、不快な思いをされる方は続きを読むのをご遠慮ください。
ですが、この小説はハッピーエンドですので！「病気ネタあっても大丈夫」という方、お付き合いください。

## ｓｉｇｎ　７　（ｓｉｄｅ　裕美）（前書き）

しばらく放置でした。すみません。
前話でも知らせましたが、７話目の内容は病気ネタが含まれます。
女性特有の病気です。
もし不快な思いをされる方がいましたら、閲覧をご遠慮願います。

## ｓｉｇｎ　７　（ｓｉｄｅ　裕美）

周ちゃんと同棲を始める少し前から、体の異変は感じていた。
月経の量が妙に多い。
気にはなっていたけれどそれ以外に不調を感じるところはなく、ホルモンのバランスが崩れたのかな…くらいにしか思っていなかった。
周ちゃんと同棲を始めてからもそういう状態が続いた。
でもやっぱりそれ以外に不調はなく『病院に行くほどでもないだろう』と思い、特に心配してはいなかった。

しかし同棲を初めて４ヶ月が経った頃から、下腹部に張りを感じるようになった。
月経の量、下腹部の張り…
もしかしたら何らかの病気なのかもしれない。
そう思うと不安になってきた。
さすがに周ちゃんに相談するわけにはいかず、思い切って明日香さんに今までの症状を話してみた。
「ねぇ…それ、早く病院に行ったほうがいいよ。」
私の話を聞いた後、明日香さんは心配そうに話した。

「もしかしたら違うかもしれないけど、子宮の病気かもしれない。私いい産婦人科の病院知ってるから、そこで一度診てもらったほうがいいわ。」

「そうですか…。でも産婦人科ってちょっと抵抗があるんですよね。内診となると、お医者さんとはいえ診せなきゃいけないですから…」

「確かにそうよね。でもその病院は女医さんだから。それに、子宮の病気なら将来不妊になる可能性だってあるから、早めのほうがいい。」

不妊。
明日香さんに言われて、とても不安になってきた。

『子どもは2人は欲しいなぁ』
いつだったか、将来子どもは何人欲しい？なんて話になって、周ちゃんがそう言っていたことを思い出した。
周ちゃんと結婚して子どもを作って幸せに暮らす。
そんな未来を思い描いていたのに、もしかしたら周ちゃんの子どもが作れないかもしれない。

そんなの嫌。
やっぱり早めに病院に行こう。

翌日は土曜日で会社が休みだったので、私は明日香さんから聞いた病院を訪ねた。

待合室には臨月が近いのだろうか、大きなお腹の妊婦さんが何人か座っていた。

私の向かい側に座っていた妊婦さんは、とても優しい目をしながら大きなお腹をさすっていた。

私もいつか、あんなふうに周ちゃんの子どもが生まれてくるのを楽しみに待つことができるのだろうか。

そんな不安を抱えながら、診察室に入った。

簡単な問診のあと、尿検査、超音波検査、触診と検査が進められていった。

触診は本当に恥ずかしかった。

今まで産婦人科にかかるようなことはなかったため、診察台に上ることすら抵抗感があった。

でもここまで来たらきちんと検査してもらうまでは帰れない、と思いなんとか耐えた。

そして全ての検査が終わり、５０代ぐらいの優しそうな女医さん――山野先生はゆっくりと告げた。

「有澤さん、子宮に筋腫があります。それもかなり大きい。８ｃｍはあると思う。…有澤さんは確か２４歳よね？有澤さんぐらいの年齢でこんなに大きな筋腫ができるのはちょっと珍しいわ。」

『子宮筋腫』という病気を耳にしたことはあったけれど、知識なんてほとんどなかった。

「症状は軽度なものから重度なものまで様々だけど、子宮筋腫はポピュラーな病気なの。経過観察のみで特に治療しないこともあれば、薬物療法で済む場合もある。ただ…」
一呼吸置いた後、山野先生は真剣な目になって話し始めた。

「有澤さんの場合は、さっき言った通り筋腫が大きいわ。手術で摘出しましょう。」
「手術の場合、子宮の全摘出か子宮は残して筋腫の摘出のみかを選んでもらうことになるわ。全摘出になれば再発の心配はいらないけれどが、もちろん妊娠はできなくなる。筋腫の摘出のみの場合は、妊娠は可能だけど再発の恐れは残るの。」
「有澤さんのような若い未婚の女性には、筋腫の摘出のみの手術を薦めているわ。子どもを作る機会を失ってしまうのは辛いことだからね。」

手術。
まさかこんなことになるなんて———。

私は動揺を隠すことができず、山野先生の前で泣き出してしまった。先生に「大丈夫よ。一緒に手術を乗り越えましょうね。」と背中をさすられながら言われたけれども、私はなかなか落ち着くことができなかった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9973w/

sign

2011年11月8日23時16分発行